

2015 年度前期 授業評価アンケート結果に対するコメント

—社会イノベーション学部—

社会イノベーション学部長 古川 良治

評価項目 14 のうち、10 項目において 5 点尺度で 4 点以上を得ており、概ね良い評価を得ていると考えられる。これは、昨年度と同様の傾向である。中でも、「シラバスと内容が一致していた (4.20)」、「教員は授業時間を有効に利用した(4.17)」、「休講または教員の遅刻が多かった(得点を逆転させ、得点が高いほうが休講や遅刻が少ない評価となる) (4.17)」、「教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた (4.15)」では相対的に高い評価となっていた。また、「教員の板書、スライド等の文字は読みやすかった」については昨年度の 3.99 から 4.07 に向上していた。

しかしながら、4 点に達しなかった評価項目もあり、「授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等) (3.91)」、「この授業のレベルはあなたにとって適切であった(3.91)」、「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した(3.62)」については、引き続き担当教員の留意事項として考える必要がある。また、「予習または復習をよくした」については昨年の 2.85 から 3.02 に回復したものの依然として低い評価となっていた。

「総合的にこの授業を評価できる」との相関係数が高かったのは、「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」($r=0.73$)、「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」($r=0.70$)であり、この傾向は昨年度と同様であった。また、相関係数が上記 2 項目に僅差で続いていたのが「教員の板書、スライド等の文字は読みやすかった」($r=0.68$)であったのに対して、「教員の話し方は明瞭であった」($r=0.15$)は相関が低く、視覚的にわかりやすくすることが授業満足度に対してより大きな影響をもたらすことが示されていた。この他に相関係数が比較的高かったのは、「教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた」($r=0.67$)、「授業への教員の熱意を感じた」($r=0.64$)であり、相関の高かった項目に関しては引き続きこれまでの授業努力を維持していくことが望まれる。